
ひぐらしのなく頃に～皆守り編～

S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に〜皆守り編〜

【Nコード】

N0712Y

【作者名】

S

【あらすじ】

鷹野と戦い敗れた梨花。

この世界で羽入は運命と戦う覚悟を決める。

そして、ここに運命と戦う為の最後の駒が揃う。

最後の世界で最後の戦いが始まる。

一話 始まり（前書き）

こんにちわ！

不定期更新で始まります。

駄文ですがよろしくお願いします。

では、始まり！

一話 始まり

「……今まで良く頑張ったな」

とある家の玄関にて一人の少年が背中を向いている少年に尋ねた。
尋ねた少年の目はまるで戦争に行く家族を送るような表情だ。

「ああ、守らないといけない人が居るから……」

「そうか……頑張れよ」

「ああ……そろそろ行くよ、弘輝」

その表情は本当に神々しく彼を止めることを許される人間はこの世には存在しないと云わしめる物だった。

弘輝と呼ばれた少年はそれを分かっていたからこう言った。

「頑張れよ……陸」

陸と呼ばれた少年はそう言われてその家から外へ一歩踏み出した。

一週間程時間が戻り雛見沢

「っ！羽入！今日はいっ？」

梨花が起きてまず言った言葉はそれだった。

前の世界で鷹野に殺された記憶はある。

これで自分の前にある運命と言う壁を壊せる可能性は高くなった。

「今日は五月の二十九日なのです！」

先程までどこにも居なかった所に角の生えた少女が現れた。
彼女が羽入である。

梨花と共に百年間運命と戦って来た相棒である。

「まだ三週間はあるのね……」

「はい！ところで梨花。

僕は運命と戦う為に実体化を行うのです」

それを聞いて梨花は驚いた。

実体化は羽入の中では禁術。

それを行うことは自分の神としての能力を捨て去るということだ。

「あなたも運命と戦う覚悟を決めたのね……」

それに羽入は静かに頷いた。

「分かったわ。

どれくらいかかる？」

「分からないのです。

でも、頑張るのですよ！」

「ええ、頑張るなさい」

その時二人は知らなかった。

運命と戦う為の役者がもう一人ここに来ていると言うことを……
その駒こそ運命を打ち破る為の最高の駒だと言うことを……

一話 始まり（後書き）

さて、今回出て来た『陸』というキャラですがひぐらしを裏の裏まで知っている

方なら知っている方が居るかもしれません。
では、また次回です。

11／03日修正しました。

二話 二人の転校生（前書き）

こんにちわ！

これから物語の日にちが変わる毎に日にちを書きます。

この方が物語の時間軸分かりやすいですからね。

では、始まり！

二話 二人の転校生

六月六日

圭一SIDE

「皆さん、今日は転校生を紹介します」

『おおおおっ!』

知恵先生がそう言ったことにより教室内のテンションが一気に上がった。

転校生が来るのは前から決まっていたことだ。

「それと転校生は二人です」

前から決まっていた転校生は一人だが急にもう一人転校生が出たのだろう。

だが、それでも俺達が歓迎するのは変わら無いけどな。

「では、入ってきてください!」

知恵先生がそう言うのと転校生が扉を開ける。

ああ! そんな不用心に扉を開けたら!

ビュンツ!

風を斬る様な音がしてボールが開けられたボールに向かって飛んで行く。

教室内に居た全員は転校生に当たることを予想しただろう。
だが……

パシ！

『！？』

転校生はボールを取ったらしい。

「――下がってろ」

良く聞き取れなかったが転校生のもう一人の転校生の名前を呼んだ
んだろう。

どうやらお互いに知り合いの様だ。

入って来たのは少年。

俺と同じ年の位だろう。

転校生（これから少年と記す）は足元を見る足元にはロープがあった。

その先に硯があった。

「ふう……やっぱりお前を先に行かせてたらヤバかったよ。
入ってきて良いよ。足元には注意して」

少年がそう言っていると少女が入って来た。
めっちゃくちゃ可愛い。

「あううう……緊張するのです……」

「ははっ、俺も少しは緊張してるよ」

少年はそう言う生徒全員に向かって自己紹介を始める。

「古代 陸です。
以後お見知りおきを」

そう言って陸と名乗った少年は頭を下げる。
すごく礼義正しい少年だ。

自己紹介をした後陸は少女を前に出す。
少女に自己紹介しろと催促しているんだろう。

「あううう……古手 羽入なのです……」

梨花の遠縁の親戚なのです……

よろしきゅ……よろ……よろしきゅお願いしゅなのです!」

『おおおおおおっ!』

羽入と名乗った少女は名乗ってから陸の後に隠れた。
知らない人よりも知り合いの方がやっぱり良いんだろう。

「皆さん、何か質問はありますか？」

「はい!」

流石魅音、素早く手を上げる。

「二人は付き合ってるんですか？」

流石にからかってやってるんだろう。
だが羽入の方は顔を赤らめている。

「あううう……」

その反応を見て陸の方は観念した様に言った。

「羽入は俺の婚約者です」

『……………はい?』

皆聞き間違いだと思って皆聞き返す。

何故か陸は羽入の耳を塞いでこう言った。

「だから羽入は俺の婚約者です」

『はあああああああああああああああつ!?!?』

余談だけどこの日震度二の地震が雛見沢で観測されたらしい。

「つまり二人共結婚の約束してるの?」

俺達が叫んでからしばらく二人は質問責めにあっていた。

気の弱い羽入に代わって殆んど陸が答えているが。

「まあね」

因みに先程陸はさっきから羽入以外には警護で話してたから魅音が

『もう敬語で話すのやめなよ』と

言ってタメ口にさせた。

「いつ結婚の約束したの？」

「秘密だよ」

人差し指を口の前に立てて教えないと言う様な表情をしている。

「ええ〜！良いじゃんケチ〜！」

余程教えて欲しかったのか文句をブツブツ言っている。

「皆さん！そろそろ授業を始めましょう！」

知恵先生がそう言って授業が始まった。

陸SIDE

授業の内容は授業と言うよりも自習だった。

確か……圭一（だったか？）や知恵先生が生徒達に教えて回っている。

俺と言えば……

「だからな、羽入。

ここは……」

羽入の専属教師をしている。

昔羽入はもっと聡明だと思っていたんだがな……

まあ、時間が流れば人は変わるんだろう。

俺も昔と比べれば相当変わった。

「陸、こっちも手伝ってくれ！」

奥さんの勉強ばっかじゃなくてさ！」

「分かった。」

じゃあ、俺は梨花さんと魅音さんを見るから。

レナさんと沙都子さん頼めるか？」

「分かった！」

そう言って羽入に断りを入れてまず魅音の勉強を見る。

そこで俺は固まってしまった。

「これ……中一の勉強じゃないか……」

さっき確か案内の時に知恵先生が

『この学校の生徒の中であなたともう一人同い年の生徒が居ます。あなたが二番目に最高学年ですからキチンとしてくださいね』と言った。

つまり、俺より上の学年は三年や高校生となる。

だが、この学校には高校生は居ない。

だから最高学年は中三になる。

魅音の身長からして彼女が最高学年だと推測出来るが……何でその彼女が中学校一年生の勉強をしているんだ……

「ははは……！私は本番でかつ飛ばすタイプだからね！大丈夫だよ……！それよりどうしたのかな？こめかみを押さえたりして」

こいつ……！

一度現実を見せた方が良いか……

「次の文中で主人公が思ったこと喜怒哀楽の内の一つを答えろ。
『その街を歩いていて少した時だ。

私の仲間が道端に落ちている人形に歩み寄った。
恐らく戦争で亡くなった子供の物だろう。

仲間はその人形を抱いて涙を流して謝った。

『私達の起こした戦争の所為で……ごめんなさい』
その言葉を聞いて私も涙を流した』」

簡単な問題だ。

小学五年生の時に塾で出された問題。

これが分からなかったらこいつは……

「怒」

小学生五年生以下だ！

「圭」！こいつは受験を諦めた方が良い！」

「え！？何でさ！？」

「当たり前だろ！」

何で何で怒ったんだ！自分も涙を流してるだろうが！

答えは哀だ！」

これで『愛？』とか聞き直したら俺は……

「愛？」

「圭」……俺は頭が痛くなった……

俺は別の人を教える……」

俺はそう言いながら頭を押さえて梨花の所に歩いて近づいた。

「よろしく……」

「よろしく願いしますなのです。にぱ」

警戒してるな。

そんなことは隠してるけど。

一応俺が味方だって言うことを教えておくか。

「どこが分からないかな？」

「ここなのです」

「ああ、ここは……」

俺はそう言ってノートに解法を書く振りをしてこう書いた。

『惨劇のことは羽入から聞いた。

俺は味方だ。惨劇を打ち破る為に協力する。

後で校舎裏で羽入を含めて話そう』

それを見て梨花は少し驚いたような顔をしたが梨花はすぐに頷いた。

そして休み時間校舎裏

「それで？ 古城 陸。あなたは何者なの？」

羽入の婚約者とか言ってるけどそんなことはありえないわ。

羽入は大昔から人には姿が見えない状態だったのだから」

校舎裏に来て一番最初に梨花はそう言った。

「なあ、俺が大昔の人間だって言うことは考えないのか？」

「あなたも羽入の様なもののなの？」

「言った通りのことだ」

俺の言葉に梨花は首を傾げた。

何を言っているのか分からなかったのだろう。

今度は羽入がこう言った。

「陸は僕の夫『古手 陸』の生まれ変わりなのです」

三話 大石刑事と陸の推理対決（前書き）

こんにちわ！

気が向いたので連続投稿です。

ちよっと大石さんの扱いが雑ですが気にしないで頂けると嬉しいです。

（大石ファンの方ごめんなさい……）

それと陸はゲームのキャラなのですが少しゲームのキャラから離れてますね……

相当黒いです。

では、始まりです。

三話 大石刑事と陸の推理対決

教室

羽入が俺の正体を言った後梨花はしばらく呆然としていた。そして一言『私を助けて』と言った。

俺はその言葉に梨花に抱きついて答えた。

「絶対に救わないとな……」

俺は誰にも聞こえない様にそう呟いた。

俺は羽入を守るために力を付けた。

だけど、その力は羽入を守るためだけの力じゃない。

目の前で助けを求めている人を救う為の力だ。

「陸く授業終わったよ！」

「え？」

見ると各々が帰る為の準備を始めていた。

深く考え過ぎたか。

「俺帰るわ」

これ以上学校に居てもすることが無い。

そう思って席を立った。

すると……

「ちょっと待った！」

そうやって俺の前に魅音は仁王立ちした。

「何だ？」

「陸には部活に参加してもらおうよ！」

「部活？」

何の部活だろう？
少し気になる……

「我が部はだな、複雑化する社会の中、活動毎に提案されるさまざまな条件下、時には順境。あるいは逆境からいにかにして……」

恐らくそれは部活の域を超えていると思う。
社会だのなんだのは一介の中学生がどうこう出来る物ではない。

「つまり部活で遊んで楽しむ部活なのです」

さっきまでの演説の存在意義を説明してほしくなった。

「さて、どうする？」

因みに羽入は入るってさ」

「羽入も？」

「あうう……」

羽入は顔を赤くしながら頷いた。

どうやら本当らしい。

羽入が入るなら入らない理由は無い。

「分かった入る」

「言っとくけどうちの部活は勝つ為なら何でもやるよ？
それにえげつない罰ゲームもあるしね」

「何でもか？」

「うん。何でも」

魅音はそう言いながらニヤけている。
勝てる気満々のようだ。

だが、何でもやるなら勝つのは俺だ。
俺を誘ったことを後悔させてやる。

「今日は、何をするんだ？」

「誰でも分かるジジ抜きだよ」

「分かった」

さあ、始めよう……

「上がりだ」

そう言ってカードを捨てる。
これで俺の三連勝。

皆は目を丸くしている。

「そんな……わたくし達が勝てないなんて……」

「陸くんすごい……」

「陸、一体何をしたんだ……」

この程度チヨロイな……

「さて、次は『古代君、前原君、お客さんが来てますよ。昇降口に行ってください』分かりました！
しょうがないな……圭一、行くぞ」

「ああ、皆先に進めててくれ」

「うん、分かった」

俺達は昇降口に向かって歩き出した。

昇降口

「んっふっふっふっこんにちわ。

興宮署の大石と申します」

警察か……俺ちょっと嫌いなんだよなあ……

「何の用ですか？」

あらかじめ言っておきますが職務質問や任意同行ならばこちらには拒否権がありますよ」

少しツンケンした言い方になってしまったが俺が言っていることは事実だ。

実際今まで警察絡みのことは法律の穴を潜って避けて来た。

「少しお話をするだけですよ。
なあに、取って食いやしません」

ちっ、面倒な奴だ……

「それより私の車に行きましょう。

ここは暑くて暑くて……

あ、でも私の車は冷房効き過ぎてますので寒かったら言ってくださいね」

こいつの車に行ったら逃げ場が無くなるな……
ここは……

「いえ、ここで話しましょう。
それとも……」

俺はゆっくりと大石と名乗った刑事に近寄りこう言った。

「この学校の誰かに聞かれたら不味いことを話すんですか？」

「っ！」

効いてるな。

恐らく心の中では『嫌な奴だ』とでも思ってたんだろう。
主導権はこちら側にある。
このまま攻めさせてもらうぜ。

「あなたが話そうとしたのは雛見沢連続怪死事件のことでしょう？」

「お、おい！陸、何だよそれ！」

知らなかったか。

まあ、俺も羽入から知らされたんだけどな。

「五年前この村にはダム建設計画があっけな。

村人は総出で反対したんだ。

それからしばらくしてダム建設の所長が死んで、その主犯が一人消えた。

一年後には古手神社の……つまり梨花の父親が死んで、母親が消えた。

二年後にはダム賛成派の……沙都子の父親が死んで、母親が消えた。
三年後には沙都子を虐待していた沙都子の『何で知ってるんですか！？』はい？」

「え？」

「俺はね『三年後沙都子を虐待していた叔父が興宮に行った』そう言おうとしてたんですよ？」

地雷を踏んだな。
大石さん。

「っ！」

「どうやら叔母が死んでいたようですね。そして、北条悟史が行方不明になったと。

圭一因みに全ての事件が綿流しって言うこの地独特のお祭りの日なんだよ

で？あなたは何を話そうとしているんですか？」

『あくまで冷静に

主導権を握ったまま話を聞け。

じゃないと主導権を奪われる』

頭の中でそう言う命令が発令される。

その命令に逆らうつもりはない。

「私はその雛見沢連続怪死事件の犯人を園崎家だと思っています。

ですから『スパイをしろってことですか？』っ！」

「園崎家は犯人じゃないですよ」

「……何を証拠に？」

「まず一年目ですね。

これは簡単です。

犯人が主犯以外捕まったことです。

何で捕まったんでしょうね？

園崎家が犯人なら匿うでしょう？

取り調べで『園崎家が犯人だ』なんて言われたら困りますから。次に二年目のダム賛成派の事件ですがこれはおかしいんですよ。だって、展望台から落としたんですよ？

もしかしたら奇跡的に助かるかもしれないじゃないですか。

そんな回りくどいことは普通しません。

園崎家ならば普通に一人殺し一人を崖から落とすでしょう。

次に古手家の件の件ですがこれはこの村がオヤシロ様を狂信していることで解決できます。

この村では古手梨花をオヤシロ様の生まれ変わりとして崇めています。

その古手梨花は両親が居ません。

人間にとってそれは相当の苦痛です。

例外もありますが彼女は今は少女です。

精神的につらいでしょう。

オヤシロ様の生まれ変わりである少女に苦痛を与える様なことをしますか？

四年目ですがこれもまたおかしいんですよ。

何で間に古手家が入ったんですか？

普通なら排除すべき北条家はさっさと排除するべきですがこの事件はそうではありませんでした。

さて、ここまでで何か質問は？」

長く喋ってから口が疲れた……

「あなたは一体何者ですか？」

「私は只の学生です。

行くぞ、圭一」

俺達は教室に向かって歩き出した。

廊下

「なあ、本当に良かったのか？」

教室に向かう途中に圭一がそんなことを言い出した。

「園崎家が連続怪死事件を起こしてるって奴か？」

その問いに圭一は頷いた。

「なら、見ろよ」

丁度教室の扉の前に着いたので俺は扉を開いた。
そこには魅音達が楽しく笑っている光景が広がっていた。

「魅音のあの笑顔を見てまだ彼女を疑うか？」

その問いに圭一は首を横に振って見せた。

「なら良いじゃないか。
皆！帰ったぜ！」

「遅いよ！早く早く！」

「ほら圭一、行くぞ」

「応！」

俺は魅音達を絶対に疑わない。
そう……絶対だ。

四話 部活での報酬

「うう……屈辱的ですわ……」

「俺が何でこんな恰好を……」

「はう……恥ずかしいよお……」

ふっ、敗者の遠吠えが気持ち良いなあ……

部活の結果だが結果的には俺が勝った。

それで全員巫女服だ。

デザインとしては俺がかつて羽入に着せられなかった大きく開いた胸元に

股の下ギリギリの袴に背中中の線まで見える開き。

正に勝者に与えられる最高の眺め！

まあ、全部イカサマをして勝ったんだけどな。

「陸、一体何したのさ……」

「ばらしても俺の勝ち揺るがない？」

それで俺が罰ゲームだ。

とか言われるのは絶対に嫌だ。

着せるのは良いが着るのだけはごめんだ。

「……分かったよ。

説明して」

「分かった」

俺は頷いてカードを捨て山の中から二枚カードを適当に拾う。
ダイヤのエースとクラブのエースだ。
俺はそれを見せる。

「覚えた？」

「うん」

俺はその返事を聞いてカードを裏返す。
位置は変えていない。

「ダイヤのエースを引いて」

「え？ 簡単だよそんなの」

魅音はそう言いながらカードに向かって手を伸ばす。
そしてカードを抜いた。
そう……クラブのエースのカードを。

「え！？ 何で！？ おじさんはちゃんとダイヤのエースを……」

「ふっ、これが俺の技だよ」

そう言いながら俺は魅音からダイヤのエースを受け取り二枚のカードを表にして持つ。

「ネタばらしだ。」

もう一度ダイヤのエースを抜いて」

「分かった」

魅音は頷いて手を伸ばす。

そして今度はネタばらしだから分かりやすいようにする。

「あ！」

気付いたか……

俺がしたのは簡単なこと。

相手がカードを抜く前にカードの位置を逆にしただけ。

「そんな……でもさ、それって二枚以上だときつくない？」

「そこは慣れ。」

何回もやっていると上手くなるから」

そうやって俺は三枚カードを引いて見せる。

ダイヤの2、スペードのエース、クラブのジャックだ。

位置関係は右端からダイヤのエース、クラブのエース、スペードのエース、ダイヤの2、クラブのジャックと言う感じだ。

そして俺は指を上手く使ってダイヤのエースとクラブのエースの位置を上手くすり替えた。

「すごい！すごいよ！陸君！」

「みい♪多分陸は将来カジノ潰しって呼ばれる様になるのです」

「もう幾つか潰したよ？」

「」「はい？」「」

「ほら、圭一、ニューヨークにある（某カジノ店）って知ってるだろ？」

三年前潰れた」

「ああ、会員なら子供も入れるんだよな。

確かたった一人の子供に潰されたって……まさか！」

「ああ、俺会員でさ」

暇つぶしに入ったら潰しちゃった♪」

俺は悪くない。

あそこのディーラーが弱いのが悪いんだ。

「「「……………」」」

あ、やばい……

空気がおかしくなった……

よし！ここは羽入をからかうか。

「それより羽入！

やっぱり似合うじゃないか！」

ここで俺は言っちゃいけないことを言ったことに気付く。

真面目にヤバイ。

頭の中で警鐘が鳴る。

でも、もう遅いだろうな……

「やっぱり似合う？」

陸、あたなは私がこんなハレンチな服が似合う様な服だと思ってい

たのですか？」

冷や汗が次から次へと流れて行く。

俺はゆっくりと後に下がる。

でも、それは逆に羽入の炎に油を注ぐ危険なことだって忘れていた。

「陸、どこに行こうとしているのですか？」

ヤバイ……

危険だ……

皆！助けてくれ！

そう念を送って皆を見る。

「「「（ガクガクガクッ！）（）（）」」」

皆震えてるね。

気持ちは分かる。

分かるけど……助けて？

「「「（ふるふるふるっ！）（）（）」」」

うそ……皆助けてくれないの？

仲間じゃないの？

そんなことを思っている間にも羽入はゆっくりと近づいてくる。

「陸、何か言い残すことは？」

くっ！

このままじゃ俺の命がやばい！

奥の手を使うしか……

くそ！

「羽入！愛してる！」

「え？」

「俺は羽入を愛してる！」

あゝ言ってるこっちもさりげなく恥ずかしい……

「な、何を言ってるのですかもう……

ボクもなのです……」

よし！何とかなった！

「こ、今回だけなのですよ？

今回だけ許してあげるのです……」

そう言っ羽入は帰る準備を始める。

それに俺のバックも持ってきてくれた。

「か、帰るぞ！羽入」

「はいなのです……」

俺がまいた種だけどやっぱり恥ずかしい……！

家に帰る間もずっと目を合わせられなかった……

五話 陸と羽入と詩音との邂逅

皆、陸だぜ！

皆知ってると思うけど俺は羽入の夫の生まれ変わりなんだ。

だから俺には羽入の手料理を食べる権利があると思うんだ。

でもな、何故か今俺は羽入と一緒にエンジェルモートとか言うファミレスで晩飯を食べてるんだ。

おかしくないか？俺達一緒に暮らしてるんだぜ？

晩飯は普通手料理だろ？何でファミレスなんだ？

鬱になりそうだ……

そしてその羽入はと言うと……

「あう〜！おいしいのです〜！」

さっきから美味しそうにシュークリームを食べている。

こいつ、いつか太るんじゃないか？

でも、こいつの幸せそうな顔を見てると注意する気力が無くなるんだよなあ……

「あう〜」

ああ……ホント可愛い……

……はっ！危うくのまれるところだった……

「羽入、そろそろここに来た理由を教えてくれないか？」

「あう？」

「『あう？』じゃない。」

甘い物が食べられるからとか言う理由だったら……」

「だ、だったら？」

「今夜は覚悟してもらわなきゃならないな」

「あう！／＼／＼違うのです！／＼／＼」

「なら何だ？」

「『惨劇』絡みなのです」

羽入はそう言いながら真面目な顔をする。

俺もその雰囲気以身構えた。

「魅音には実は双子の妹の詩音と言う人が居ると言うのは説明したと思うのです」

「ああ、それで？」

「その詩音と言う子惨劇の種になりかねない子なのですよ」

「……詳しく聞かせろ」

羽入は俺の言葉に頷き説明を始めた。

詩音は紗都子の兄である悟史に恋をした。

だが、彼は北条家の人間。

それは許されぬ恋だった。

そんなある日悟史は警察に叔母の事件の件で話を聞かれることになる。

詩音は禁じられているにも関わらず自らの身分を明かし悟史を守った。

結果としては悟史は守られることになるが詩音は爪を三枚剥がされることになった。

ここは全ての世界で共通のこと。

ここからは世界によって違うが詩音が惨劇の主人公の世界だとある日の部活で圭一がレナにぬいぐるみを渡してしまう。

その時魅音に『魅音にはこんな可愛い物は似合わないよな!』と言ったらしい。

その言葉は魅音の心に大きな傷を作ってしまった。

そして魅音はそれを詩音に相談する。

詩音はそう言う相手が居ることに嫉妬する。

その結果どんどん悟史への感情が暴走し園崎家に犯人が居ると思い始め復讐を始める。

そして魅音、圭一、沙都子、梨花、村長、祖母を殺し最終的には自殺する。

そういう世界があったらしい。

「成程……でもよ、そう言うことなら俺は接触する必要が無いんじゃないか？」

その部活の時に圭一に人形を渡せて言って魅音にはあんまり浮かれるなって言えば

詩音は惨劇の主人公にならないだろ」

「駄目なのです。前の世界ことなのですが……」

この前の世界では紗都子の意地悪な叔父が帰って来て皆で協力して紗都子を救ったらしい。

その中には勿論詩音も含まれていたそうだ。

「成程な……奇跡は皆が信じないと起こらないってそういうことか」

「はい。惨劇も詩音が居ないと打ち破れないのです」

「で、ここに来て詩音に会うことにしたと。

甘い物を食べたかっただけじゃないんだな」

「当たり前なのです！」

羽入はそう言って胸を張った。

すると……

ガッシャアアアッン！

そんな音が鳴ったので気になって見てみると少女がオタク三人に囲まれていた。

「せっしやのジーンズがベタベタなり！早く拭くにより！」

その言葉で状況が理解できた。

どうやらあのウェイトレスにあのオタク共がわざと足を引っ掛けウエイトレスを転ばせ

デザートを股間にかけてさせたと言う訳か。

成程……外道だ。

「あ！陸！あの子詩音なのです！」

「何？」

確かに見てみると魅音に良く似ている。

「羽入、手荒な真似をするけど怒らないでくれよ?」

「安心するのです。
大丈夫なのですよ」

俺はその言葉を聞いてゆつくりとオタク共に向けて歩き出した。
そして俺はオタクに声をかけた。

「おい、下郎」

「は? 何ものにやり!
お前なんかには用はないにやり!」

「まあ、俺の話聞けよ」

俺はそう言ってオタクの肩に右手の手の平を置く。

「しつこい奴にやり!
何度もお前に用はいだだだだっ!」

「同士!? お前! 同士に何をした!」

「ただ、握力を込めて握ってるだけだけど?」

ただ俺の握力はボーリングの玉を握りつぶすくらいの力はあるけど
な。

「同士のから離れろ!」

オタク……ああ！もうBで良い！

オタクBはそう言って殴りかかって来る。

俺は左の手の平で拳を受け止める。

勿論左手にも力を込める。

「いだだだだっ！」

するとオタクCが動こうとしたのでそれを止める。

「動くな！動けばこのオタク二人の握っている場所を握り潰す！」

「っ！」

オタクCはその言葉を聞いて動かずに止まった。

俺は三人の忠告する。

「お前等、もうこの店に顔を見せるなよ？」

もし、俺がこの店に来てお前達の顔を見たら……」

俺はAとBを離してこう言った。

「コンドコソコロシテヤルカラナ？」

こう言う喋り方は疲れるけど結構効果的だ。

「「「し、失礼しましたああああああっ！」」」

三人共一気に逃げて行った。

ま、あの程度の奴等を追い払えない訳無いけどな。

「あの……」

「ん？」

声のした方を見ると詩音が呆然と俺を見ていた。
俺は知らない様な感じを装ってこう言った。

「大丈夫か？ みお……魅音じゃないな」

「え！？」

やはり驚いているんだろう。
俺も見た限りでは髪しか違いが分からない。

「俺は古代 陸だ。」

あそこで座ってるのが俺の婚約者の古手羽入。
古手神社の古手梨花の遠縁の親戚だ」

「えっと、私は園崎詩音です」

ああ、違いが分かった。

声が若干こつちの方が高い。

本当に若干だけど。

「よろしく。」

少し話さないか？」

「え？」

「北条悟史」

「!？」

その言葉に詩音は反応した。
やっぱり詩音は悟史が好きだったんだな。

「北条悟史のことを話さないか？」

「……あなた何者ですか？」

「オヤシロ様が惨劇を食い止める為に使わした遣いだ」

「はぁ？」

その反応は『こいつ何言ってるんだ？』見たいな目だったけど当然だな。

「とりあえず話そう。」

あんたに取っても有益な話があるかもしれないぞ」

「はい。」

分かりました。

話を聞かせてちゃんとした話を聞かせてくださいよ」

「ああ」

俺と羽入はそれからしばらくの時間をエンジェルモートで過ごした。
詩音と話しをする為に……

六話 陸と羽入と詩音との話

羽入から聞いた話だと詩音はこの時期園崎家が悟史を消したと思っているらしい。

更に沙都子の所為で悟史は限界まで傷付けられたと思っているらしい。

その二つの誤解を解かなければ惨劇は訪れてしまう。
ならば俺がその二つの誤解を解いて惨劇を訪れないようにすれば良い。

と言うことで俺達は詩音のバイトが終わるのを待っている。
今は20…50詩音のバイトが終わるのが21…00。
後十分待っていれば良い。

「しかし……羽入はそんなに甘い物が好きだったか？」

確かに昔は甘い物を見ると嬉しそうな顔をしていたがここまでじゃ無かった筈だ。

一体昔からの千年の間に羽入に何があったんだろう？
少し気になる……

「甘い物が好きになったのは陸の所為なのですよ？」

「俺の？」

なら羽入が太ったら俺の所為か？

何とかしないと……

「陸の作る甘い物がおいし過ぎてその魅力に逆らえなくなったのです」

「それでも太るから少しは自重しろよ」

そう言いながら羽入の口に付いているクリームを取ってやる。
羽入は少し顔を赤くしたが気にしない。

「あうう……／＼／＼／＼／」

ああ……可愛い……

何て言うか……保護欲が……

「何をしているんですか？」

「おっとすまん」

気が付かなかった……

俺としたことが……次から気をつけなければな。

「座ってくれ」

俺は俺の向かい側の席を指す。

羽入はそれを見て俺の隣に移動した。

そして俺は語り出した。

「まず、何で俺が北条悟史を知っているかだ。
信じなくても良いが俺は本当にオヤシロ様から真実を聞いた」

詩音は『こいつは何を言っているんだ』と言う様な顔をしているが
構わずに俺は続ける。

「まずは確認事項だ。
まず一つ。」

お前は北条悟史は園崎家が消したと思っている」

その質問に詩音は黙って頷いた。
どうやら他の世界と同じらしい。

「二つ目、お前は北条悟史は北条沙都子が傷つけたと思っている」

その解答は肯定の頷きだった。

ふむ……ならばそれでも良いだろう。

二つの誤解を消してやろう。

まずは園崎家の方だ。

これは大石に説明したことを説明すれば良いだろうと思い
大石に説明したことを話した。

「……なら悟史君はどこに行ったの？」

これは知りたいだろう……

当たり前だ。

自分の好きな奴が行方不明になったら行方を知りたくなる。

「答えてやる。」

必ず会わせてやる」

「陸!？」

羽入は驚いた顔をしている。
恐らく『東京』の件だろう。

「大丈夫だ。何とかする」

俺の真剣な顔に羽入は結局折れてくれた。

「……分かったのです」

渋々だが羽入は頷いてくれた。

俺は羽入の返事を聞いて詩音に向き直った。

「紗都子の件を聞いてくれるな？」

「……はい」

その返事を聞いて俺は語り始めた。

「詩音、お前は紗都子が悟史を傷つけたと思っているがそんな無い。それにもしそだったとしても紗都子はその罪に気付いている筈だ」

「そんなことはありません！」

その声に周りの客は詩音に視線を向ける。

俺は詩音に座る様に手で催促する。

「あの子は罪に気付かずのうのうと生きてるんです。なのに何で気付いていると思うんですか？」

声に若干怒気が混じっているがあまり怖くない。

「なら紗都子に会いに行くか？」

「え？」

この件は二人が解決するべきだ。

「彼女と会って話をしろ。」

そうすればお互い思ってることを話せるだろう？」

「……そうですね、なら明日の放課後に分校に行きます」

「分かった。」

それと悟史の件だが明後日だ。

良いな？」

「はい、分かりました」

そうして俺達は解散して各々自分の家に帰って行った。

陸の家

今は夜中の1…00。

羽入は二階の俺の部屋で寝ている。

俺は一階の電話でとある場所にかけている。

「弘輝か？」

『どうした？ 陸』

「入江機関、知ってるだろ？」

『ああ、ちょっと待ってろ』

弘輝がそう言うのと保留音が鳴る。

それから一分弱でその音が止んで弘輝の声が聞こえた。

『良いか？メモ取れよ』

「ああ」

そう言われて俺はメモの用意をする。

『行くぞ、入江機関は雛見沢症候群を研究、ならびに治療の方法を見つける為の機関だ。』

少し前までは軍事利用も考えられてたけど小泉ってお偉いさんが死んだ所為で軍事利用はされなくなっちゃったらしい。

元々雛見沢症候群自体が危険な病ってことで研究を反対されてたけど小泉は反対派の声を抑えてたらしい』

「つまりあれか？小泉は入江機関のパトロンだったのか？」

『ああ、実は入江機関の中に鷹野って奴が居てそいつと個人的交流があったらしい』

「そうか、分かった」

メモを取るのが大変だった……

「それと入江機関に圧力をかけて欲しいんだが……」

『おう、良いぞ。』

どんな風にかければ良いんだ？』

「『一瞬で潰されたく無かったら村人のとある一人の住人を北条悟史に会わせろ。』」

無論俺も同行させろ』」

『北条悟史って確か治療薬の検体だろ？』

「ああ、色々あってな。

明後日だ」

『了解。』

圧力かけとく。

お休み〜』

「ああ」

俺はそう言って受話器を置いた。
本当に持つべきなのは良い友だ。

「さてと……寝るかな」

もう眠くなってきた……

俺は二階に上がって羽入の顔を見ながら眠った。

第三者視点

入江機関

「どうすれば……」

入江は悩んでいた。

その原因は先程東京からかかってきた一本の電話だった。

『今すぐあなたの機関を潰されなくなかったらある一人の住人を北条悟史に会わせろ。』

その地に居る一人の男も同行する。日時は明後日だ』

まさか、東京がこんな電話を寄こすとは彼は思っていなかった。この研究は完全に秘密裏で行われている。

それを東京が敗れと言ったのだ。

しかも命令からして断ればこの診療所は潰される。

もしそうなら……

「悟史君……沙都子ちゃん……」

難見沢症候群で苦しんでいる二人が最悪の死に方をしてしまう。

それだけは避けなくてはならない。

「受けよう……」

それが彼女達の為になる……

入江はそう考え目の前に居る悟史の病室のガラスに手を付けた。

七話 詩音と沙都子との邂逅

六月七日

今は授業が終わり放課後。

詩音が来るまで皆を待たせている。

「ねえ、陸。

一体何で皆を待たせてるの？」

これで魅音からのこの質問は十回目。

「何度も言わせんなって……

待ってれば分かるって言ってるだろう？」

こう言っても魅音は飽きずに質問してくる。

実は俺はさっきから汗を掻いている。

詩音が何をしだすか分からない。

「はぁ……」

それにしても遅い……

もう十分は待ってる。

何かあったのか？

そんなことを思っていると……

「来たか……」

「え!？」

「みいちゃん!？」

「魅音!？」

「魅音さん!？」

詩音が来た。

詩音は一人男を連れていた。

その男を見て俺は荒事に慣れている様な男。

顔にサングラスをかけている為目は見えないが恐らくそのサングラスを外せば

鋭い目が見えるだろう。

「詩音!？何でここに!？」

魅音はそう言って詩音に近づこうとする。

それを俺は言葉で遮った。

「俺が呼んだんだ」

「どうして？」

「その人はオヤシロ様の遣いらしいですよ」

冗談で言ったのに真顔で言われたら否定できないじゃないか。

実際はオヤシロ様の夫だし……

「良く来たな、詩音。

でも、後の人は誰だ？」

俺がそう聞くと大男は頭を下げてお辞儀をする。

「葛西辰由と申します。
詩音さんの付き人です」

葛西辰由？どこかで聞いた様な……まさか！

「散弾銃の辰！？」

散弾銃の扱いにおいてはまさに右に出る者はいないと謳われた伝説の男！？

園崎組に所属しているとは聞いていたが……実際に会えるとは……

「もう現役は引退しています。
お忘れください」

「は、はい。」

古代 陸と申します」

俺はそう言って礼をする。

危うく吞まれるところだったぜ……

「で、陸さん。」

この子が沙都子ちゃんですか？」

詩音は紗都子の近くに居た。

俺はさりげなくを装って紗都子の後に移動する。

それと同時に葛西さんも詩音の後に移動していた。

やはりこの男は本物だ！

殺気が痛い……！

「ああ、そうだよ。」

紗都子、こちらは魅音の双子の妹さんの園崎詩音さんだ」

「は、始めましてですわ」

そうやって沙都子は戸惑いながらもお辞儀をする。

俺はと言うと詩音が武器を持っているかどうか探っていた。

詩音はナイフを持って葛西は拳銃を一丁持っている様だ。

俺は丸腰なだけだな……

ま、しょうがないか……

「回りくどいのは嫌いなんで単刀直入に聞きますね」

詩音がそう言うのと周りの空気は本当に重い物になった。

そして、その空気の中詩音はこう言った。

「悟史君が消えたのはあなたの所為だって分かっています？」

詩音がそう言った瞬間圭一達が何か言おうとしたが俺は目でそれを制した。

この場合は詩音と沙都子が解決するべきだ。

だが、詩音が沙都子に何かをしようとした時は……勿論容赦しない。そんなことを思っていると紗都子は一度少しだけ目を瞑って得こう答えた。

「はい、分かっていますわ」

「え？」

詩音は俺の言っていたことを信じていなかったんだろう。

驚いた顔をしている。

「私にはいいーにいいーの後でずっと隠れていました。それがにいいーにいいーのことを傷つけていた……それは気付いていました。

だから……あなたがもし、私のことを恨んで殺したいと言うんなら……

何の抵抗もいたしません」

その顔は覚悟を決めた表情だった。

沙都子は俺の方を向き目で俺に指示をした。

『私を守らないで』

本当にそう言ったのか分からない。

だけど……俺の頭の中でそう言った沙都子の声が聞こえた。

そんな気がした。

でも……

「詩音、沙都子を殺したら俺はお前を殺すぞ」

「陸さん!？」

「沙都子、思い出してみろ。

お前の兄貴は優しかったんじゃないのか？」

俺は羽入から悟史の優しさを聞いて知ったんだ。

悟史が本当に沙都子のことを大切に思っていたことも……

そんな悟史が大切にしていた沙都子を傷つける奴は絶対に許さない！

「詩音、悟史は消える前にお前に『沙都子のことを頼む』って言うたんじゃないのか？

お前は頼まれてたのに沙都子を傷つけるのか！？
傷つけると言うんなら俺を殺してからにしろ！」

「う、うわあああっ！」

詩音は叫びながら隠していたナイフを取りそのナイフを俺に向かって斬りかかった。

だがそのナイフは俺に届かなかった。

「やめましょう、詩音さん」

止めたのは詩音の付き人、葛西辰由。

葛西は手の平でナイフの刃を握っていた。
その手からは血が次々と流れ出ている。

「か……さ……い？」

「この少年は守ると決めたら絶対に守ります。
彼が守る時で戦う時は私ですら勝てません」

「……あなたもすごい意志の持ち主ですね。
出来ればあなたとは戦いたくありません」

「ふっ……詩音さんは私が説得しましょう。
失礼します」

葛西は血が流れていない方の手で詩音を引き摺って出て行った。

「すごい奴だ……」

俺はそう呟きながら葛西の出て行った出口を見ていた。

八話 仲良し？姉妹

六月八日

どうしてこうなったんだろうな？

俺は確かにこうなることを望んだぜ？

でもさ、物事には行き過ぎてこともあると思うんだ……
え？何のことか分からない？

なら、見てくれ。

俺が頭を抱える理由が一瞬で分かるぞ。

「嫌ですわー！ー！」

「沙都子！ちゃんと南瓜を食べないといけませんよ！」

こう言うことだ……

今は昼飯時。

何故かいきなり詩音が来て沙都子の前に重箱（i n 沙都子の嫌いな野菜）を沙都子の前に置き

『悟史君からあなたことを頼まれています。
なのでまずは好き嫌いから』

とか言って無理矢理野菜を食べさせている。

見えて少し可哀想だがまあ、良いだろう。

詩音は沙都子の為を思っているので誰も詩音を止めない。

若干何名か（部活メンバー殆んど）は面白そうに沙都子を見ている
が放っておく。

「詩音、一昨日の約束忘れてないよな？」

「はい、当たり前です」

悟史のことは口止めしている。

もし、言えば沙都子も会いたいと言いつくだろう。
それは流石に不味いからな。

「さてと、そろそろ弁当の時間も終わりだ。
部活だ！野郎共！」

「「「おおおおおっ！」「」」

案外アドリブでもついてきてくれるんだな。

校庭

「今日は鬼ごっこだよ！」

「よし！絶対勝ってやるぜ！」

「俺が鬼だったら圭一は絶対負けるけどな」

「何を！」

「良い雰囲気じゃん？
ほらじゃんけんするよ！」

「「最初はグー！じゃんけんポン！」」

各々出した手はこうなった。

俺グー

羽入グー

魅音グー

沙都子チヨキ

梨花グー

レナグー

特別参加の詩音グー

「見事に沙都子が負けたな」

一瞬で沙都子が負けるとは……

「不祥この北条沙都子が鬼を務めさせていただきますわ……」

ホントに悔しそうに言う沙都子。

少し可哀想だがしょうがない。

「やっぱり鬼が追いかけるのは百数えてからにする？」

「いや、それだと偶にズルをする奴が居るから俺の問題を解いてか

らだ。

『ある事故現場で一人の少年が血を流し倒れていた。
現場には次の三つが落ちていた。

アルバム

手帳

カメラ

少年は事故で死んだか？それとも殺されたか？』

答えは梨花に教え梨花は沙都子が答えてから百秒間は捕まらない。
無論百秒間の間梨花を追いかけることは禁止だ」

俺は梨花に答えを教えて離れた。

そして

「始め！」

その魅音の合図と共に各々散らばって行く。

そんな時圭一が俺の近くに寄って来た。

「お前って案外酷いのな……」

「何がだ？」

「問題文の最初で『事故現場』って言ってだろ？
殺されたなら殺人現場だ」

「流石〜♪そう言うこった。

大抵は現場に落ちている物から解こうとするけどそんな思考じゃ解けない問題だ」

そんなやり取りをしていると

「陸さん！騙しましたわね！」

そんな声が聞こえる。

恐らく問題を解いたんだろう。

必死に俺を追いかけてくる。

「騙された恨みを……」

まあ、良いか……

圭一、ん？おい！どこに行く！」

「さらば！」

くそ！圭一を囚にする作戦が行えない！
ならば！

「え！何をする気ですの！こっちに向かってくるなんて！」

そう、俺は沙都子に向かって走り出したんだ。

人には奇襲をかけられてから何秒間か対応出来ない時間がある。

それは米軍兵士で平均十五秒。

その時間は如何に訓練しても零にはならない！

更に沙都子は兵士ではない。

部活メンバーの中でも彼女はトラップを得意とする。

体育会系では無く頭脳で攻める方！

そこから計算して五秒だ。

今から五秒以内に……

「ちよっ！止まりなさいませ！」

一秒……

「た、タッチしますわよ！」

二秒……

「ちょ！そろそろ不味いですわ！」

三秒……

「ひ、ひいっ！」

四秒……

「ぶつかりますわ！」

五秒！

俺は脚に全力を込めて一気に跳んだ。

そして着地地点は沙都子の後。

いくら紗都子であっても今の一瞬で通り過ぎた場所にはトラップを仕掛けられない！

「じゃあな！沙都子！」

俺はそう言いながら沙都子から離れて行った。

「きいいいいっ！絶対に捕まえますわ！」

そんな宣戦布告を受けながら。

「ふう……さて、皆どうしてるかな？」

俺は校舎の屋上に隠れていた。
見ると皆俺を探している。

「皆捕まったか……」

俺は腕時計を見る。

「後十分……」

ある意味命がけだ。
負けたら相当恥ずかしい格好をして下校しなければならない。
それだけは避けたい。

「ふむ……後七分」

考えごとをしている間に三分経った。
ここも長くは持たない。
そう思って降りると……

「あ！陸君！」

「レナ！」

しまった……！見つかった！
レナに紗都子と同じことをするのは危険だ。
下手をすれば俺の脚がレナの顔に直撃する。

そう思って、俺はレナとは逆の方向に逃げる……が。

「見つけた！」

「圭一まで！」

挟まれた……！

こうなっては……

全力を出すしかない！

俺は屋上に登る。

「レナ！挟み撃ちだ！」

「うん！」

レナと圭一も屋上に上がって来た。

どうやら俺は屋上で時間を稼ごうと思っていると推測したらしい。

それはそうだろう。

いくら低いとは言え屋上から飛び降りれば怪我をする。

だが、それは常人の話だ。

俺は常人じゃない！

「うおおおおおっ！」

「な！マジかよ！レナ逃がすな！」

「う、うん！」

俺は校庭に向かって跳んだ。
だが、万事休すはこの事。

跳んだ先には魅音達が居た。

「陸、終わりだよ」

「私達の勝ちですわ」

「みい♪僕の勝ちなのです」

「梨花ちゃま、さりげなく活躍を自分だけの物にしようとしていますね」

「そう言うことなら僕の勝ちでもあるのですよ」

ふっ、そう言うことか……

「魅音、お前、圭が一週間行方不明になってそれからいきなり『これは圭一の遺骨だ』とか言われて骨を置かれたらどうする？」

「信じないね。この目で見た物が真実とは限らないから」

「そうだな……それが正しい解答だ！」

俺はそう言って羽入の方に走る。

「何をしていますの！？自分から！」

「羽入は良い嫁だってことを証明するのさ！」

「」「はぁ？」」

その場に居た全員が意味が分からず首を傾げたが俺には分かった！
つまりこう言うことだ！

「だらあっ！」

俺は羽入を拾い上げた。
そして梨花も回収。

「二人共！落とされない様にしてろよ！」

「「はいなのです！」」

「ちょ！どう言うことですよ！」

「分かりたいなら俺を捕まえろ！」

皆、分かったか？

ヒントは俺が屋上から跳び下りてから皆が発した台詞にあるぜ。
解答は次回だ！

九話 勝った理由

「「「負けたあゝゝゝ！」」」

そう言って倒れ込む五人。

結果的に俺は勝った。

まあ、身体能力が違うからな。

そんなことを思っていると沙都子が悔しそうな顔をしながら俺に尋ねて来た。

「羽入さんと梨花は鬼では無かったんですの？」

その五人共その問いの答えが知りたいのだろう。

皆俺の方を見ている。

俺は羽入の頭を撫でながら答えた。

「魅音、俺の質問覚えてるか？」

俺がそう聞くと魅音は『何だっけ？』と首を傾げた。

こいつは遊びのことしか頭に無いらしい。

二十分前のことを忘れているのは相当重症だ。

「俺は『圭一が一週間行方不明になってそれからいきなり

『これは圭一の遺骨だ』とか言われて骨を置かれたらどうする？』と聞いたんだ」

「ああ、そうだったね」

「すっかり忘れてたよ」と言いながら魅音は頭を掻いた。

本当にこいつは駄目かもしれない。

「羽入と梨花は鬼のふりをしてたんだよ」

「「「はあああああっ!?!?」」」

五人の叫び声が鳴り響いた。

まあ、そうなることは最初から予想はしていた。

まさか二人が鬼のふりをしていたなんて思わなかったんだろう。

俺は驚いている表情を浮かべている皆を見ながら説明を始めた。

「俺が屋上から飛び降りた後の羽入と梨花のセリフを思い出してみろ」

「確か梨花ちゃんが『みい♪僕の勝ちなのです』だよな?」

「羽入さんは『そう言うことなら僕の勝ちでもあるのですよ』でした
たがそれが……あ!」

沙都子は気付いたか。

流石トラップの名人と言ったところだな。

羽入と梨花の仕掛けたトラップを見抜いたか。

「何だよ? 一体何なんだ?」

圭一と魅音と詩音とレナは気付いていないらしい。

俺は少しヒントをあげた方が良くかなと思ってこう言った。

「あの状況はお前達鬼の勝ちだった。

だからあの状況では『私達の勝ちだ』そう言うべきだ。

なのに羽入と梨花は『私の勝ちだ』と言ったんだ」

分かりにくかったかな？
でも、分かるだろ。

「あ！分かったぜ！」

「レナも分かった！」

そう言って二人は嬉しそうにハイタッチをする。
これで分かっているのは魅音と詩音だけ。
時間の関係でもう待てない。

「締め切りだあゝゝ」

「「分からなかったゝゝゝ！」」

二人はそう言いながら悔しそうな顔をして地面を叩く。
こいつ等そんなに悔しかったのか？

「正解は！『羽入と梨花が鬼のふりをしていた』でしたゝ」

「「ああゝそう言うことかゝゝ」」

二人は納得した様な表情をした。
まあ、納得してくれないと自分のヒントを出す才能を疑うところだったぜ。

まあ、そんなことより……

「皆、罰ゲームの準備は良いか？」

「「「ギクッ!」」」

どうやら逃げられると思っていたらしい。
こいつ等やっぱりバカだ。

「さあゝて、罰ゲームを楽しもうかあゝ?」

「「「きゃあああああつ!助けてえええええつ!」」」

その後罰ゲームとして『メイド服着用で校長先生の頭を撫でる』と
言う罰ゲームをした皆は仲良く包帯をして帰った。

十話 迷い

六月八日

今日は入江機関に行かなければいけない日。

詩音と約束したからしょうがないと言えましょうがないだろう。

それでも緊張してしまう。

羽入もステルスモード（俺と梨花以外見えないから俺が名づけた）
でついてくるらしい。

その羽入も緊張して……

「あう……分からないのです……」

緊張して……

「ここはこうすれば良いんだよ、羽入ちゃん」

「あう！分かったのです！」

緊張……

「違うけど可愛いよおおっ！お持ち帰りいいいつ！」

「あう！？陸！助けて欲しいのですううっ！」

……

「緊張してねえじゃねえか！」

ガラッ！（俺が席を立つ音）

ビュンッ！（音速の速さでレナに近づく音）

パンッ！（レナの首に手刀を当てる音）

バタ……（レナが羽入ごと倒れる音）

文章で説明すると俺は叫びながら席を立って音速の速さでレナの傍に移動。

そして、レナの首に手刀をくらわせ気絶させた。

でも、レナは羽入を抱きかかえていたので羽入はレナの下敷きになっていた。

「ごめんな、羽入。大丈夫か？」

俺は羽入を助けながらそう尋ねた。

羽入は少し怒っているのか口を尖らせている。

「全く……もうちょっと良い助け方は無かったですか？」

「ごめんごめん」

羽入は元の口調に戻っているがまあ、大丈夫だろう。

皆気にして無いし。

ってか授業中に俺達は良くこんなに暴れられるよな……

キンコーンカーンコーン♪

授業終了の合図が鳴り響き寝ていた魅音が起きて魅音が授業の終わ

りの号令をする。

勉強してないから馬鹿だと思われるんだとあいつは自覚が無いのか？

「さあ、皆！部活の時間だよ！」

「「「おおおおっ！」「」」」

まあ、この部活の時間は楽しいから良いんだけどな。
さて……今日はどんなイカサマをしようかな？

部活終了後の罰ゲーム時間

「はああっ！」

「ふんぬ！」

ドゴオオオッン！

俺は今校長先生と戦っている。

と言うのもそれは罰ゲームの所為だ。

今日の部活は人生ゲームだった。

人生ゲームではイカサマが出来ない。

そして運悪く負けてしまったのだ。

結果罰ゲームで『校長先生の頭を撫でる』と言う罰ゲームをくらってしまった。

頭を撫でられたが校長先生がマジギレしていると言う訳だ。

ってか校長先生強いんだけど。

俺とやりあえるとか校長先生はどこで修行してたんだ？

「中々やりおるの……今の童にしては強い」

「五歳の頃から修行してたんでね」

俺の修行が始まったのは五歳の頃。

そう……『あいつ』に親を……殺された時からだ。

俺は『あいつ』に復讐する為に強くなったんだ。

羽入のことを思い出したのは修行している最中。

俺が十歳の頃だ。

ある夢を見て思い出したんだ。

羽入は多分『復讐なんてやめるのです!』って言うかもしれないけど……

俺は復讐を達成する。

それが俺が強くなった理由だから……

「……迷っておる」

「え?」

「お主の目は迷っておる。」

自分の目的を果たすべきか、否かを」

「……………」

「良く考えるが良い。」

お主の本当の目的を。

お主が強くなった本当の理由を」

校長先生はそう言って校長室へと戻って行った。

「迷ってる、か……」

迷っている筈が無い。

でも、何だろう。

何で……

「こんなに胸が騒いでるんだろう……」

俺は校長先生の言う通り迷っているんだろうか……

「陸？　どうかしたのですか？」

「あ、ああ、何でも無いよ」

いつの間にか俺の傍に居た羽入の頭を撫でながら俺はそう答えた。

他の皆もいつの間にか近づいていた。

皆に心配はかけられない。

だから、俺は嘘をついた。

「さて、俺は帰るよ。

詩音、待ち合わせ場所は入江診療所だ。

忘れるなよ？」

「は、はい」

俺はその返事を聞いて羽入と一緒に帰って行った。

十一話 入江診療所にて……

俺は今詩音との約束を果たす為に入江診療所の前に居る。
何かが起こった時の為に一応銃は持って来た。
羽入もステルスモードでついてきている。

「ふう……」

俺は溜め息をついて空を見た。
これから何が合ってもこの空は蒼いままだ。
そうあの時も……蒼かった……

『母さん！父さん！』

『陸！逃げろ！ぐわあああつ！』

『陸！言う通りに……きやあああつ！』

『父さん！母さん！何で……こんなこと……に』

「っ！」

昔のことを思い出して顔を顰めてしまう。
それを見て羽入はこう尋ねた。

『陸、大丈夫なのですか？』

恐らく不安にさせてしまったんだろう。
羽入はそう言う表情を読み取るのが上手いからな。

「大丈夫だよ」

何とか微笑んで返すことは出来た。

羽入は心配性だから微笑んで返さないと妙に勘ぐられる。

羽入に心配だけはかけたくない。

「陸さん」

羽入と話していたらいつの間にか来ていた詩音に声をかけられた。

「詩音、心の準備は良いか？」

俺がそう言うのと詩音は静かに頷いた。

それを見て俺は入江診療所の扉を開く。

今日は入江診療所は臨時休業になっている。

だから今日入江診療所にはスタッフ以外人は居ない。

だから入江機関の方に入っても問題ない。

扉を開けて入ると前に入江診療所所長 入江京介が居た。

「詩音さん!？」

入江は詩音を見て驚いた顔をした。

確か詩音は『雛見沢ファイターズ』って言う草野球チームのマナー

ジャーだったから入江と詩音は知り合いだったんだな。

「入江さん驚いているところを悪いが北条悟史の所に連れて行って
もらえないでしょうか？」

「そ、そうですね。こちらへどうぞ」

入江はそう返事をする。俺達を先導し始める。
そしてある一室に着いた。

その部屋はガラスで仕切られた集中医療室の様な部屋。
そして、ガラスの向こうには……

「悟史君！」

そう……ガラスの向こうには去年行方不明になった北条悟史が居た。
彼の腕や足には拘束用の革や色々な拘束具が巻き付けられていた。

「入江さん、北条悟史の現状説明を希望します」

「……分かりました。少々長くなりますがご了承ください」

入江の話はまず雛見沢症候群の説明から始まった。
次に悟史が雛見沢症候群の末期になってしまったこと。
去年からあの状態だと言うこと。
もし起こしたらどうなるか分からないと言うこと。
そして……治るのか分からないと言うこと。

「そんな……じゃあ、悟史君はもう私の頭を撫でてくれないの？
もう『むう』って言ってくれないの？」

嘘……何で……何で……ッ」

詩音はそこまで言う。と泣き崩れてしまう。

ようやく会えたと思ったらいきなり『もしかしたらもう起きないかもしれない』

そう言われたショックは測りきれないだろう。

死んだのならばまだ諦められる。

死は人に平等に訪れる物だから。

でも、これは……余りにも酷過ぎる。

これは『もしかしたら起きるかもしれない』と言う希望を持てる。

いや、持ててしまう。

もし彼が起きなかったら詩音はそんな希望を抱きながら何年も何年も生きていかなければならない。これ以上の拷問はこの世に存在しないだろう。

そんな拷問を何故彼女達が受けなければならないのか。

彼女達が何をしたんだろう？

彼女達の罪は何なのだろう？

彼女達はただ幸せに暮らしたかっただけなのだ。

それなのに何とこれは酷なのだろう……

そう思った時俺は悟史の病室の扉に近づいていた。

「陸さん？」

「……詩音、今から悟史を起こす」

「「「!？」」」

俺がそう言った瞬間その場に居た全員が驚愕の表情を浮かべた。

俺が今から行う行為は悟史の心に負担をかけてしまう行為。

それに悟史は見る物全てを敵とみなしてしまう。

それでも俺は……彼女達の為にやらなければいけないんだ。

「古代さん！彼を起こせばあなたが危険な目にあうんですよ！それでも『良いんです』え？」

「彼が帰って来るのを待っている子達が居るんですよ。」

俺はその二人の為に何かしてあげたい」

俺はそう言ってパスコードをうちはじめる。

古代 陸 陸将

認証コード ＊＊＊＊＊＊＊＊ 認証

指紋コード ＊＊＊＊＊＊＊＊ 認証

ピー

そんな電子音が鳴って扉が開く。

そして俺は部屋に入る。

部屋に入った俺は慎重にベットに近づき拘束具を外していく。
その行為を羽入は何も言わずに見ていてくれた。

「羽入、外に出て見ていてくれ。

俺の戦いを」

羽入に見ているなと言っても羽入は首を横に振る。

だからこそ、『外で見ている』と言ったのだ。

羽入は頷いて部屋の外に行った。

そして俺は離れて

「起きろ！北条悟史！」

そう怒鳴った。

すると悟史の体がピクンと動いた

「……起きたか」

悟史はゆっくりと体を起こす。
見えた顔は誰も信賴していないような顔だった。

「さて……どうなるか……」

鬼が出るか蛇が出るか……

「……………」

悟史は何も言わない。
ただ俺を見ているだけだ。

「さあ、始めようぜ。」

北条悟史、お前の疑心暗鬼をぶっ壊してやるよ」

俺はそう言って拳を構えた。

悟史はそれを見て襲い掛って来る。

その拳を見て俺が思ったことは……速い。

悟史はここまで速い拳を繰り出せるのか？

そう思う程だ。

でも……悟史は戦闘経験が無いに等しい筈だ。

こっちは戦闘が本職の人間。

怪我をさせずに取り押さえることは容易い筈だ。

そう思っている間にも悟史の拳が飛んでくる。

俺は拳の勢いを使って一本背負いをする。

悟史は上手く受身を取り衝撃を減らした。

相当上手く投げたから受身が取りやすかったんだな。

「本気を出す訳にはなあ……おい！悟史！」

俺が悟史を呼んでもお構いなしに悟史は攻撃を続ける。

「聞く耳もたずか？まあ、良いや。

聞けよ、今この村はお前達を迫害している。

俺がそれを解いてやる。

お前を虐待していた叔母も居ない。

叔父はまだ居るけどもし来たら俺が守ってやる。

絶対に裏切らない。

お前を殺そうとしている奴は居ない。

お前を傷つけようとしている奴は居ない。

居るのは頼もしい……仲間だ」

「………僕は」

「ん？」

「僕は許されても良いのかな？

叔母を殺した僕が……幸せを願っても良いのかな？」

何だ……そんなことで悩んでたのか。

こいつは帰って来れなかったんじゃない。

帰ろうとしなかったんだ。

自分は人を殺したから罪深い人間だと決めつけて……

だから、幸せになろうと思わなかったんだ。

ホント……勘違いも甚だしいぜ。

「良いんだよ、お前が幸せになればその分幸せになれる人も居る。
見ろよ、彼女がその一人だ」

俺はそう言って部屋の外に居る詩音を指差す。

「それに彼女だけじゃない。

お前の仲間も、お前の妹も、

お前が幸せになることを望んでいるんだ」

「……………」

「だからな……悟史」

俺はそう言いながら悟史の肩に手を置きこう言った。

「いい加減、自分を許してやれよ」

「っ！ そうだね……僕が幸せになることで誰かが幸せになるのなら

……

まずは自分を許さないかね……！」

「ああそうさ、さあ、この部屋から出よう。

お前の部屋はもうこんな所じゃない。

少しすればお前の妹と会える筈だぜ」

俺はそう言いながら悟史を連れて部屋の外に出た。

その後の事だけど……悟史の症状は安定し普通の生活をして良いらしい。

今日は診療所で検査漬けで診療所に泊るらしい。

詩音が『今日はここで寝ます！』とか言って悟史の病室で横になった時は驚いた。

話を戻すと悟史は明日には退院して学校にも行けるらしい。

因みに俺は……家でもものすごく羽入に怒られた。

『なんて危険なことをしたんですか!』とか

『あなたは馬鹿ですか!』とか色々言われた。

まあ、何とか説得して許してもらった。

さて、明日は園崎家にでも行きますかな……

十二話 姉妹の再会

六月九日

学校が終わり俺は皆を連れて沙都子の家の前に来ている。

梨花と沙都子の方の家じゃない。

北条家の家の前だ。

沙都子や悟史にとっては辛い思い出がある場所。

羽入以外の皆は『沙都子にとってはここは辛い場所なのになんでここに連れて来たんだ』

と言う目で俺を睨んでいる。

まあ、この顔もすぐに笑顔に変わる訳だが。

「あら？ 皆さんもう来てたんですか？ 早いですね」

「来たか……」

悟史を迎えに行っていた詩音がやってきた。
後ろには入江と

「にーにー……？」

そう、沙都子の兄、北条悟史が立っていた。

沙都子の顔がみるみる内に涙顔になっていく。

そして我慢できなくなったのか悟史に向かって抱き付いた。

「にーにー！ にーにーにー！」

沙都子は泣いた。

今まで我慢していた分を。

沙都子は今までずっと待っていたのだ。

悟史が帰って来ると信じて……

帰ってきたら普通の生活を悟史と送ろう。

朝起こして朝食を作って……そんな普通の生活を送るのが沙都子の夢だった。

その夢を叶える為に沙都子は信じて今まで待っていた。

そして、その沙都子の願いは今、叶えられる。

二人の兄妹の意思によって。

「沙都子……これからはずっと一緒だよ……」

悟史はそう言って沙都子を抱きしめる。

そうだから良い……

二人は幸せな生活を送っていれば良い。

二人にはその権利があるのだから。

「陸さん、あなたはすごいですね。

難見沢症候群を患者と話すだけで治すとは……」

入江は誰にも聞かえないようにそう言って来た。

入江は今まで苦労してきたらしい。

生体解剖等の非人道的なこともやってきた。

でもそれを裁くことは出来ないだろう。

それは彼の人を救いたいという気持ちから行ってきたのだから。

「大したことはしていませんよ。

家族・友人の合いや患者本人の情熱を呼び起こす刺激が

医者客観的な死んだんをはるか覆すこともありますから」

「確かに、それは実際にあり得ることです。脳に関わる臨床ではしばしば起こるれっきとした事実ですから。ですが、それを起こせるだけでもかなりすごいことだと思います。私は彼女達と自分の境遇を重ねていました」

そう言って入江は語りだした。

かつて自分の父親が脳に疾患を受けとても仲の良かった母親に暴力を振ったこと。

父親が死んだあとその母親は父親と同じ墓に入れないで欲しいと涙を流しながら訴えたこと。

自分に力があつたならば二人の仲を元に戻せたのではないかと後悔したこと。

それが切欠で神経外科の道を進んだが精神外科はこの世から抹殺され絶望していた頃に雛見沢症候群の研究の依頼がありそれを引き受けたこと等を話してくれた。

「雛見沢症候群は脳の病気です。

そのの所為である三人は苦しんでいた……

私は三人を救おうとしていましたが研究は最近暗礁に乗り上げてしまい最近絶望していました。

それをあなたは救ってくれた……一人の人間として礼を言います。ありがとうございます……」

入江はそう言って頭を下げる。

そこまで深く礼を言われると何だかちよっとくすぐったい。それに……

「まだまだですよ。

この村にはまだ『北条家に関わるな』と言う園崎家の号令があります。」

私はその号令を解かなくてははいけません。
彼女達を救う為にも……」

「強いですね……私はそこまで強くなれません」

そう言って入江は俯いてしまう。

そんなことは無いのに……

「あなたは諦め無かったじゃないですか」

「え？」

「あなたは今まであの三人を救おうと諦めなかった。

一度もね。そんな人は弱くありません。

とても強い人です。

あなたのことを弱い奴だなんて言える人は居ませんよ」

俺はそう言ってその場から歩き始める。

それを見て入江は俺を呼びとめる。

「どこに行くんですか？」

「無論、園崎家です。

やる必要がありますから」

「そうですか……頑張ってくださいね」

俺はその言葉に後ろ手を振って答えた。

十二話 陸とお麴との話（前書き）

すいません……今回は短いです。

十三話 陸とお廻との話

俺は今、園崎家の頭首の間に来ている。

本当ならば事前に色々話を通すべきだったのだろうがその必要は無いと判断した為すぐにここに来た。

「で？何の話だい？」

そう尋ねて来たのは園崎茜。

園崎組のNO.2の葛西さえも従えていると噂の女。

「北条家の件ですよ。北条悟史が帰って来たから丁度良い時期と思いまして」

「……どう言う意味だい？」

あくまでしらを切り通すつもりか……

まあ、そんなことはさせないけどな。

「あなた達も北条家の件はどうにかしたいと思っているんでしょう？」

かつて園崎家は『北条家に関わるな』と言う号令を出した。そこから北条家の差別が始まった。

最初は園崎家もそこまで酷くするつもりは無かったのだろう。

だが、園崎家の影響力はこの村の中では大き過ぎた。

徹底的に差別をしなければ次は自分かもしれない。

そんな恐怖心から園崎家の予想以上に北条家を差別してしまった。

更に、古手家がダム戦争の時に消極的でリーダー失格だと言われて

いたことから

タカ派を演じ雛見沢死守同盟を導いていた園崎家は自分達から人が離れることを恐れて
号令を解除できない。

「全部お見通しって訳かい。

でも、あんた、どうやって私達に号令を解除させるつもりだい？」

「この場では無理でしょう。

あなた達も号令を解く切欠を求めているんでしょう？

その切欠が『たった一人の少年に殴りこみをかけられた』なんてもんじゃ嫌でしょう。

私はもう既に脚本を用意してます。

今からその脚本の内容を言います。」

「話しな」

俺は茜さんにそう言われて話し始める。

沙都子を救う為に俺が用意した脚本の内容を……

「すごいね……本当にそれが出来るのかい？」

「大したことじゃありませんから必ず出来ます。

お魎さん、この脚本でよろしいでしょうか？」

俺は上座に居るお魎さんに話かける。

お魎さんは少し思案顔になってこう答えた。

「別に良いんね。上手くことを運びな」

「了解しました。今日はここで失礼します」

俺はそう答えて頭首の間から出た。

だけど俺は羽入から説明されていたある男の存在を忘れていた。
物事は完璧に進まないと言うことを……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0712y/>

ひぐらしのなく頃に～皆守り編～

2011年11月30日21時50分発行